２０１３．１月１２日　静岡県伊東

文責　宮城

学びの共同体冬季セミナー講演より

講師：石井順治

・東海国語教育を学ぶ会顧問
・「学びの共同体」スーパーバイザー

著書
・「学び合学び」が生まれるとき
・「学び合学が」が深まるとき
・学びの素顔
・教師の話の聴き方・話し方

［　文学の読みを深めるために　］

読みは一人ひとりみんなちがう。
その表れ方もまた違う。

事例①　「お手がみ」　４の場面

がまくんの「ばからしいこと言うなよ」
について

Ａ子：「これって、おこっちゃったのかな？」
教師：Ａ子の発言を受けて皆に音読を指示する。

・クラスのほとんどの子が怒っていると
口にする。

Ｂ子：「どうして？親友なのにおこるのかな？」
教師：ペアでの話し合い
Ａ子：「親友だから、怒っているわけじゃなくてね、
もう手紙なんて来ないやっ！て気分で言ったと思う。」

【上記のやり取りに３つの対話がある】

1、テキストの対話　…物語に入っている
2、仲間との対話　…仲間の対話から学んでいる
3、自己との対話　…仲間との対話から自己の変容がある

Ａ子はあの疑問を出す前からテキストと対話している。当然仲間と対話している。そして、自分の疑問に対して仲間との対話の中からＡ子自身の新たな考えが生まれた。
　読みは一人ひとりさまざまで、学級で「読み」はこれだ！こうだ！を出してはいけないものである。
　一人ひとりの子どもの中に「読み」は生まれる。

○さまざまな読みに出会わなければ
　「読みが磨かれない。」→読みの交流が不可欠！
　文学の「読み」→　　「学び合う学び」
○「言葉に触れるように読む」
　どれだけテキストと対話しているか？
▲読み取ったことの発表で終わらない、対話の質、学びの質を常に教師は問う
○「読みの層を重ねる」
　テキスト・仲間との対話によって
▲すぐ「気持ち」「気持ち」の人物の心情主義に走らない
○「読み描く」
　自分なりの解釈やイメージを描く

事例②「ごんぎつね」　最終６の場面

・人間のテリトリーに入ってしまうごん
・見つかって撃たれてしまう。

▲　気持ちを聴いてしまう教師！
　・兵十の気持ちは
　・ごんの気持ちは
▲　心情追求主義になると疲れる
　教師の聴きたい「答えを語る」ことに陥る

◎この場面をどう読むか？読ませるかは教師の裁量アイデアである。
作品の言葉に触れる。全体を描く。

▲細かく心情を読み取ることが目的ではない
　自分なりに読み描く姿勢を大切にしたい。

［　文学の学び合う学びの可能性　］

事例③「忘れられないおくりもの」

そばでアナグマが聞いていることが不思議？
教師：グループで話し合うように指示

『心の中で・・・』が腑に落ちない真美
真美：話しながらテキストにもどる行為あり
真美：雲とかあるやんか・・・
　・・・聞こえたんじゃないかな？
　真美は挿絵の丘にこだわる。
　挿絵から「わかった」ジャンプが生まれる。

事例④　文章の中には一言も出てこない「受け継がれる」を挿絵から見つけ出した。

和也：なんでキツネの前にアナグマがいるの？
和也が勝手に見つけ、和也の心の中に何かの火を灯した。…

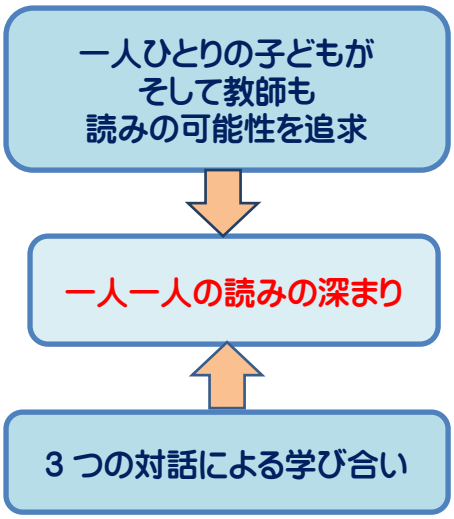
作者（スーザンバーレイ）は文章には記さないが作者の思いが挿絵にあった事実を見つけた。

□　キツネはアナグマに何を話しているんだろう？
きつね：「お前のじいさんは…」想像の世界を創る。

「学び合う学びの世界では答えは見つけるものでなく一人ひとりの子どもの心の中に創り出すものである。」

ほとんどグループで話さなかった和也が見つけたことは非常に意味があった。
グループだったから、和也の学びが生まれたのでないだろうか。テキストと対話し、仲間と対話し、そして自問自答の自己との対話が成立している環境だからこそ一人ひとりの子どもの中で何かが生まれる。和也の気づきもその一つではなかっただろうか。

［　一人ひとりの読みの深まり　］



一人一人の読みを深めるためには一人ひとりの子どもが読みの可能性を追求しているかどうか。
それよりも前に教師が読みの可能性を追求しているかどうか。
授業の中でちゃんと 3 つの対話がなされているか？単なる読み取ったことの発表会になっていないか？
3 つの対話によって子どもをどう育てていくかは学校、学級、子ども一人ひとりをしっかり見据えてそれぞれの先生方が、それぞれに取り組んでいかなければなりません

【Q＆A】

Q：教師が「問い」を出したときは、の問いに対して教師は解答を持つべきではないか。

A：問いに対して最初から「まとめ」ようとは思っていない。「子ども達が考えることを聴き合う」ことが目的である。
教師の読みのレベルが高いとは思っていない。大人の方が読みが高いと思っていると、子どもに対して「こんな風に読むんだ！」になってしまう。
(小畑)

Q：子どもの「先生はどう思う。」に対しての対応
子どもは教師に、教師の答えを求めるが？

A：文学に正解はありません。これは原則です。
一番大切なのは「学び合う」ことです。
単なる「読みの発表」にならないようにする。
仲間の話を聴いて「ああじゃないか？」「こうじゃないか？」…「読む」とは創造的な行為である。
子どもが創りだす「学び」を。受容の学びではなく、子どもが創りだす学びを目指してください。
(石井)

［　佐藤　学　］

子どもといっしょに追求する。
子どもの躓きから学ぶ。
子どもの学びから学びなおしていく。

文学をオーセンティックにするためにの３つ
・主題を追求しない
・「なぜ」と問わない
・「気持ち」を問わない　…　難しい！
じゃどうするか？
教えかた「学び」へのアプローチ、テーマへの導き方法は教師の数だけある。
例）私だったら…ごんの死ぬ運命はいつ決まった？
…・あくまで僕の解釈です。

・言葉とテキストを何度も出会いなおしていく
・言葉の中につながりを見出だしていく
・言葉を読み描いていく
・言葉に触れていく

テキストは御馳走である。御馳走に正しいも間違いもない。大切なことは「おいしいかどうか？」教師がおいしさを決めることはできない。
テキストと子ども達を恋人同士にする。夢中にさせる。文学や芸術は、教師が豊かに出会いを演出してあげる。